

カナこそ日本語の文字

—「わたし」「わたくし」「あたし」「あたくし」—

カナザワ フミカズ

カナモジカイのホームページを ごらん になった かた から メール を いただく こと が よく ある。もちろん 反対意見 の かた も いらっしやる。それは よい の だ が、かいて ある こと を ろくに よみ も せず に、「わたし」と「わたくし」が よみわけられない から と いうて 漢字 の 廃止 を と なる の は 短絡的 だ。」 など と おっしやる かた も いる。

「私」という漢字がかいてあっても、「わたし」か「わたくし」かわからない。これでは文字としてのやくわりをはたしているとはいえない。われわれはこう問題提起しているのだから、まずこのことについて自分の判断をだしたうえで反論してはいかがかとおもうのであるが、それができるひとはいないようである。漢字中毒になるとまともにものをかんがえられなくなるようだ。

さて、「わたくし」の系統とおもわれるコトバは「わたし」以外に「あたし」「あたくし」「わし」「あし」「わっち」「あたい」「あちき」「あちし」「わて」「わい」などたくさんある。いずれもたんに一人称の人称代名詞というだけでなく、性別や年齢、地域のちがいを反映しているのであるから、これはなんとしてもかきわけなければならぬ。カナならそれができる。ところが漢字となると、「わし(儂)」しかよみかたをしめすことができない。日本語は漢字(=中国文字)ではまともにかけないのである。

ところで、「私」という漢字であるが、ひだりの「禾」は作物をあらわし、みぎの「ム(し)」は、「自分にかかわる」という意味をあらわすといわれている。どのようにしてこの字ができたのかはいろいろな説があるが、いずれにしてもまちがいないのは(どの漢字についてもそういえるのであるが)、古代中国の風習や社会制度を反映したものだということである。

古代の中国人がかれらの社会と言語のためにうみだした漢字を、日本語を正確にはかきあらわせない文字を、現代の日本(語)人がつかい-つづけなければならぬいかなる理由があろうか。